

かつて、琉球王国として広大な海域を有した地域であり、有人島約50の島々は言語・文化面で同質性を保ちながらもそれぞれ独特の文化を継承しながら自然と共存した環境を形成してきた。しかし残念ながら第二次世界大戦による戦災やその後の米軍統治下における基地建設によって、特に沖縄本島の地域固有性が失われていった。

当コンペの対象地である沖縄本島中南部地域は、市街地を分断する広大な駐留軍用地の存在が、長期にわたり望ましい都市形成や交通体系の構築、産業基盤の整備を妨げ、地域の振興発展を図るうえで、大きな障害を抱えてきた地域である。沖縄本島の中部地域には、県民の8割近い約115万人が暮らしており、人口密度は過密である。沖縄は自然豊かな島であるだけでなく100万人都市に匹敵する都市でもあるという認識をもつことは、沖縄の将来を構想するうえで極めて重要である。

また、「中南部都市圏駐留軍用地跡地利用広域構想（平成24年3月沖縄県）」において指摘されている通り、これまでの駐留軍用地跡地は、各市町村が独自に策定した跡地利用計画のもとに、商業施設や住宅地として利用されるケースが目立ち、既存の周辺市街地との関係性や中南部都市圏全域での位置づけを十分に考慮した開発が行われてきたとは言えない。さらに跡地の立地特性や地形、基地があることで保全されていた緑などがごとく失われ、沖縄の風土を尊重した計画とは言い難い部分もあった。加えて、今後の跡地利用でも同様の方針で市街地開発を行なった場合、住宅供給が過剰になるという沖縄県の見解もある。

そしてもう一つ重要なことは、これまでの駐留軍用地跡地の利用に地元住民が計画段階から自己決定権を持って計画に誇りと責任を持って進めてきたと言えなく、必ずしも地域社会像の目標やテーマが共有されないままに開発が進められてきた。

今後返還される大規模な駐留軍用地跡地の利活用は、都市構造の歪みを是正し、県上構造の再編のための貴重な空間であることに加えて、沖縄が世界に誇る美しい自然と独自のアイデンティティで真の自立を獲得する最大で最後のチャンスである。そのためにはかつて琉球王府が有していたと同様の「政策の自己決定権」が基本となるべきである。

さらに、地域が新たな機能や魅力を創出したり、地域資源を守り、伝え、活かすことで、適切な範囲での安定した経済基盤を確立し、「経済成長こそが発展」という幻想から脱却し、地域住民が責任ある自立を受け入れ、自らの手で心の豊かさやゆとり、幸福度を高め続ける地域社会、いわゆる「成熟地域社会」を形成することこそが重要である。

そこで当提案では、これまでの跡地利用の様々な課題から学び、沖縄におけるこれからの駐留軍用地跡地利用にあたって、沖縄の未来を「つなぐ・いдаく・になう」という基本理念のもと、「沖縄が目指すべき『アジアにひらかれた成熟地域社会』を実現する10の提案！」を行うものである。

提案の基本理念



私たちは、沖縄の新たな発展につなげるための大規模基地返還跡地利用においては、「成熟地域社会」の形成こそが重要であると考えます。沖縄が目指すべき「アジアにひらかれた成熟地域社会の実現」のために3つの基本理念を掲げて提案を行います。

つなぐ

「つなぐ」には、豊かな個性のつながりがこそ強く住みよい自立した社会・コミュニティをつくるという意味が込められています。

いだく

「いだく」とは、沖縄に脈々と受け継がれてきた「包み込むやさしさの精神」と「空間を形成する基本となる『抱護』という考え方」を意味しています。

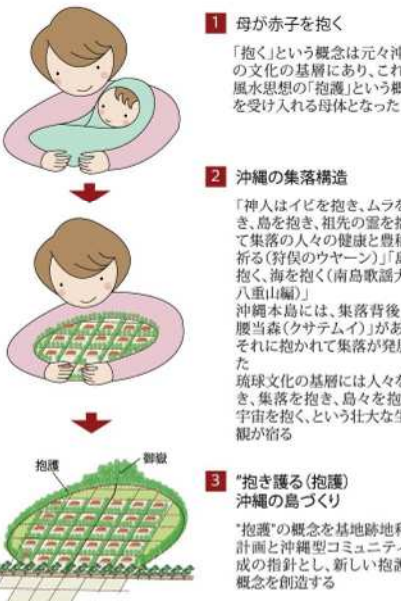
になう

「になう」には、「まちづくりを自らが考え、判断し、責任をもって推し進めていく」という意味が込められています。

軍用地跡地利用広域構想の実現



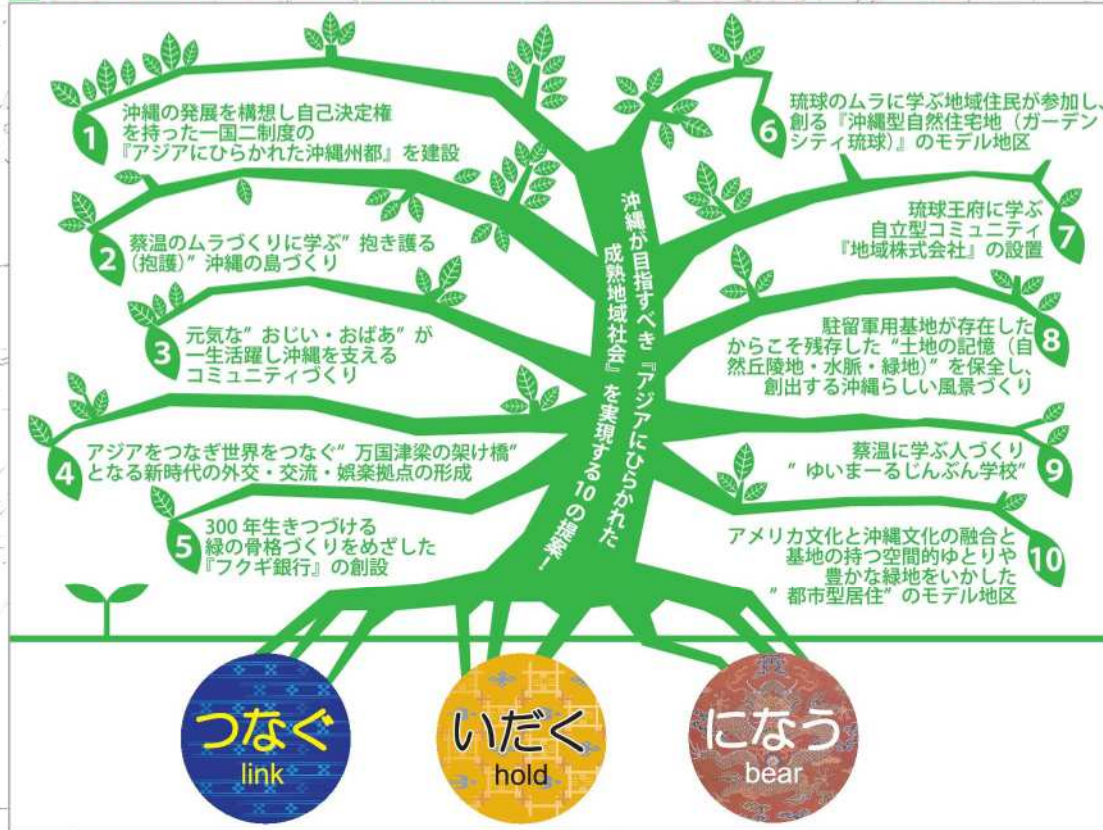
「抱き護る(抱護)」沖縄の島づくり



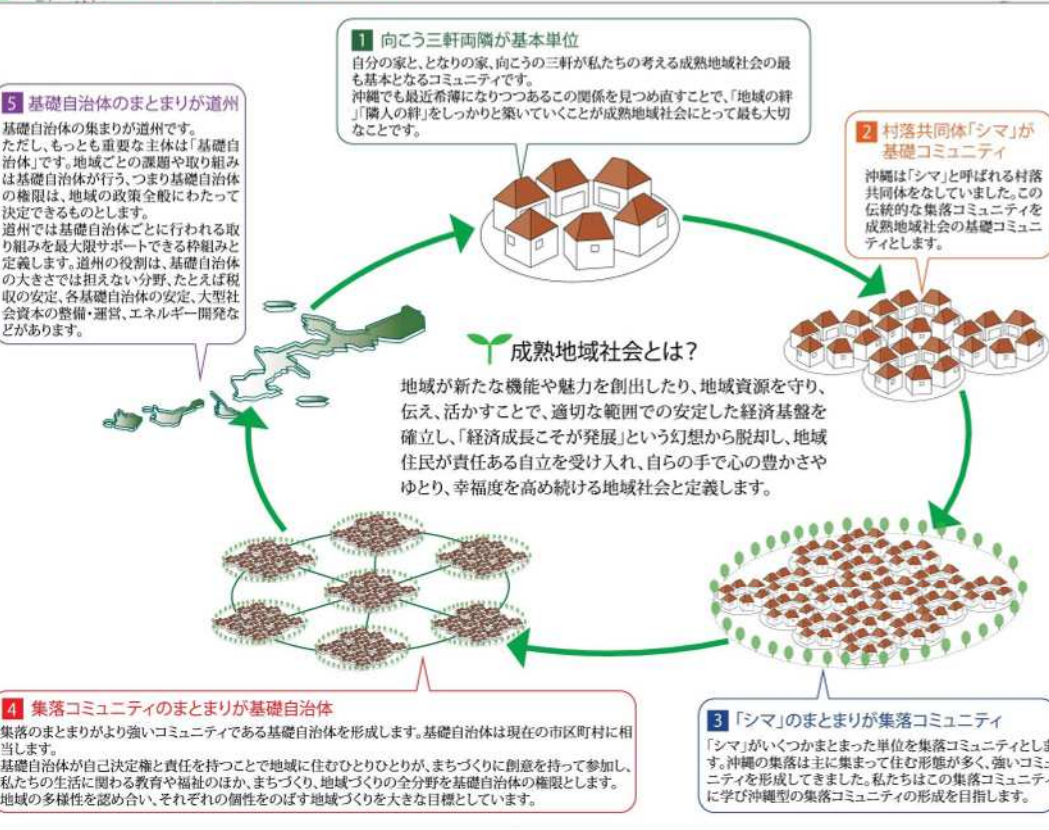
沖縄の新たな発展につなげる大規模基地返還跡地利用計画コンペ

沖縄が目指すべき『アジアにひらかれた成熟地域社会』を実現する10の提案！

沖縄が目指すべき『アジアにひらかれた成熟地域社会』を実現する10の提案！



成熟地域社会の形成と沖縄州都



10の提案と基本理念との関連性マトリクス

10の提案	つなぐ link	いだく hold	になう bear
1 沖縄の発展を構想し自己決定権を持った一國二制度の『アジアにひらかれた沖縄州都』を建設	基地で分断された沖縄本島中南部をつなぎ、人口100万人を超える都市圏を創出し、近隣アジア諸国と寄り合いしていくための礎を築く	大規模基地返還が、沖縄を豊かで成熟した社会に発展させる最後のチャンスであることを見守り監視することによって、基地跡地が沖縄全体を包括(抱護)する利用計画を推進する	沖縄県単独州を実現し、沖縄が自ら考え、判断する自己決定権を行使するとともに、将来への大きな責任をになう
2 蔡温のムラづくりに学ぶ『抱き護る(抱護)』沖縄の島づくり	蔡温がムラづくり・国づくりに関して培い実践してきた抱護の理念を後世につなぐ	現在は失われつつある『村抱護・近抱護』を、全ての跡地利用計画における緑地計画の基本とし、ムラを抱く抱護(抱)を創出する	抱護(抱)の真諦により、いばば「抱き合う集落」を創出し、現在市街地との一体的な地域構造を形成することで沖縄らしい風土づくりをになう
3 元気な「おじい・おばあ」が生活し活躍し沖縄を支えるコミュニティづくり	おじい・おばあが、新しいコミュニティの潤滑油となり住民の心をつなぐ/長年かけて蓄積してきた「じんぶん」を地盤に還元、抱護につなぐ	コミュニティを抱き護る包み込むようなおじい・おばあやささしさを強めた沖縄型ホスピタリティ社会の推進	長年培ってきたおじい・おばあ経験・知識と地域の課題や悩みとのマッチングによる地域の新たな新しい手の創出
4 アジアをつなぎ世界をつなぐ「万国津梁の架け橋」となる新時代の外交・交流・娯楽拠点の形成	大交易時代より蓄積してきたアジア諸国との交易・交流実績となる新時代の外交・交流・娯楽拠点の形成	アジア・太平洋地域の重要な地盤にあることを見守り監視することによって、日本とアジアとの日本の地盤を築く	国際交流こそがアジア・太平洋地域の持続的安定と平和に資するという理念のもと、日本の国際交流の推進役をになう
5 300年生きつづける緑の骨格づくりをめざした『フクギ銀行』の創設	屋敷林や街路樹の連続による緑の回廊によって、緑地・生態系をつなぐ/自然や沖縄の歴史を大切にしたいという気持ちをつなぐ	フクギやリュウキュウマツなどの街路樹や自然緑地を増やすことで、集落・シマを抱く(抱護)する緑の骨格を形成する	県民一人一人が「木を増やし、植える」運動に参加することで、基地返還を推し進める大切な役割をになう(静かな強い意思表示)
6 琉球のムラに学ぶ地域住民が参加し創る『沖縄型自然住宅地(ガーデンシティ琉球)』のモデル地区	琉球王府に学ぶ自立型コミュニティ『地域株式会社』の設置	価値観と責任の共有を目指すコミュニティデザインで、住民同士のしなやかなつながりを育み、成熟したコミュニティ形成を図る	向こう三軒両隣のコミュニティを基礎単位とし、住民・専門家、おじい・おばあ(アドバイザー)と地域株式会社それぞれが役割と地盤を誇りを持ってになうまちづくり
7 琉球王府に学ぶ自立型コミュニティ『地域株式会社』の設置	地域の共通の課題を見つけ、認識することで、地域を本気で変えたいという住民同士をつなぐ(大人による地域の抱護)	地域内の課題を解決し、地域住民を本気で変えることで、地域を見守る大人を増やす(大人による地域の抱護)	地域の課題解決を事業化し、地域住民を本気で変えることで、事業(課題解決)への参画を強く促し、地域の抱護の手を育成する
8 駐留軍用地が存在したからこそ残存した「土地の記憶」を保全し、創出する沖縄らしい風景づくり	地形や植生、石など土地に残された記憶を保全し、沖縄らしい風景を創出するための重要資源と位置づけ、将来にわたってつなぐ、伝えていく	基地内に残された地形を検証、活用することで、集落を抱き護る土地利用計画づくりを進める	沖縄における景観条例・デザインルールを策定することで、「本来の沖縄らしい風土」に立ち返る際の重要な指針としての役割をになう
9 蔡温に学ぶ人づくり「ゆいまーるじんぶん学校」	地盤おとなが教育現場に立ち、子どもとつながり教育でつなぐ。社会の仕組みをテーマとすることで、社会につながる教育を目指す	コミュニティ全体で子どもを育て、つなぐ。教え合うという安心した子育てができる地域風土を醸成(コミュニティが子どもをいだきまもる)	地域のおとなが知識や経験を活かして、学校教育とは違う実践的で創造的な子どもの教育をになう
10 アメリカ文化と沖縄文化の融合と基地の持つ空間的ゆとりや豊かな緑地をいかした『都市型居住』のモデル地区	既存地形をいかした基地内住宅地の施設配置、道路設計を評価し、建造物のリノベーションによる活用で、沖縄とアメリカをつなぐ居住空間を創出する	基地内に残された緑地の植生・樹種を検証し、住宅地を抱護する緑を保全・整備することで周辺市街地との調和を図る	返還直後は既存の米軍住宅を賃貸住宅として活用し、県外・国外からの移住者を受け入れるとともに、跡地利用計画実施までの財源確保の役割をになう



アジアをつなぎ世界をつなぐ“万国津梁の架け橋”となる新時代の外交・交流・娯楽拠点の形成

琉球王朝以来、東アジア諸国との交易交流から形成された外交能力を發揮する“海邦交流拠点”

かつて大交易時代に広大な版図を有した琉球王国の外交能力に学び、地理的優位性を最大限發揮した拠点を形成します。特に外交・交流・娯楽に特化した基盤を整備し、沖縄ならではの楽しく多様な交流を積極的に展開することにより、世界各国の方々から美ら海・沖縄で国際交流(会議)を行いたいと思えるような海邦交流拠点の形成を図ります。



地理的・歴史的な特性を活かしアジア・太平洋地域との活発な国際交流こそ持続的安定と平和に資するという考え方

沖縄の地理的・歴史的な背景を活かし、基地跡地の地勢的優位性(立地、州都、那覇港、那覇空港など)を活かした国際交流拠点を形成します。

- 外交地域としてのメリット(地勢)
- 国際交流拠点に向けた基盤整備
- 民間経済交流団体との連携
- 大規模な国際会議に対応できる施設
- 那覇市・沖縄市・沖縄州都拠点・沖縄型自然住宅拠点・国際交流拠点などの協力的な連携

アジア・太平洋地域の共通課題に対する研究・発信拠点

- 世界にひらかれた交流と共生の息づきを担う国際感覚に富む人材の育成
- 国際的な災害援助・研究拠点
- アジア・太平洋地域への国際協力・貢献活動拠点
- アジア・太平洋地域の安定と平和に資する平和・人権協力外交の拠点
- 国連関連施設の誘致
- 物流拠点・災害時の備蓄拠点



元氣な“おじい・おばあ”が生活躍し沖縄を支えるコミュニティづくり

なぜ“おじい・おばあ”が沖縄を支えるのか?

超高齢化社会を迎え生産年齢人口(15歳以上65歳未満)が減るなかで、若者に支えられるという従来の仕組みを見直し、沖縄の元氣な“おじい・おばあ”が生活躍し、若者と共に沖縄を支えることでこれからの超高齢化社会をポジティブに捉えるという考え方を示すモデルとなります。

おじい・おばあが、基地跡地の新しいコミュニティの潤滑油となり住民の心をつなぎます。コミュニティを包み込むおじい・おばあのやささと強さをいかした沖縄型ホスピタリティ社会の形成を推進します。



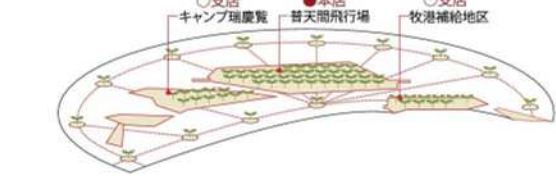
300年生きつづける緑の骨格づくりをめざした『フクギ銀行』の創設

『フクギ銀行』とは?



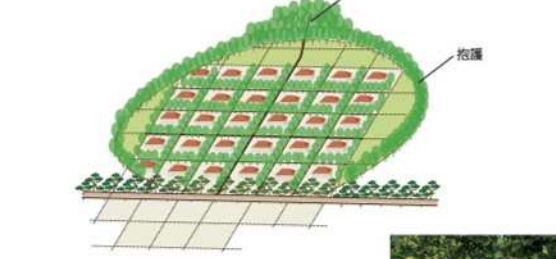
『フクギ銀行』は、お金の代わりにフクギを貯めることができる銀行です。みなさんが集めた“フクギの種”はフクギ銀行でお預かりし、大切に苗木へと育て、沖縄の緑の骨格づくりに役立てます。やがて育った苗木は基地跡地の緑地づくりだけでなく沖縄中を緑でいっぱいになります。

『フクギ銀行』の本店・支店・出張所



基地跡地にまず『フクギ銀行』を創設します。本店は普天間飛行場、支店はキャンプ瑞慶覧、牧港補給地区につくります。ただし、基地返還には長い年月が必要なので、まずは基地周辺の空き地や耕作放棄地を出張所として苗木を育てます。そうすることで、基地返還後の緑化や沖縄の緑の骨格づくりへのムードを高めることができます。

なぜフクギを育てるのか?

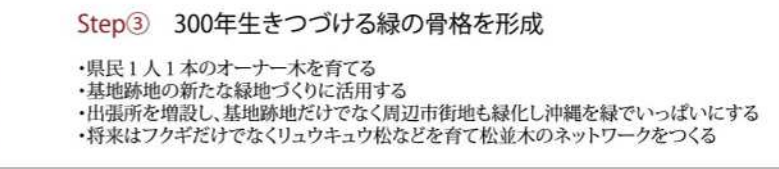
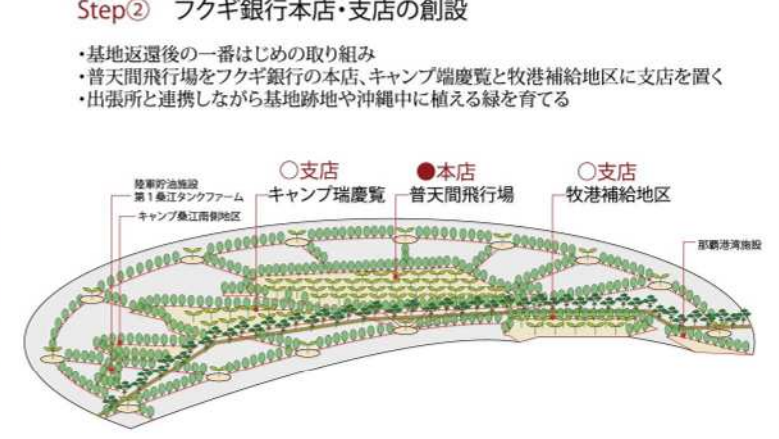
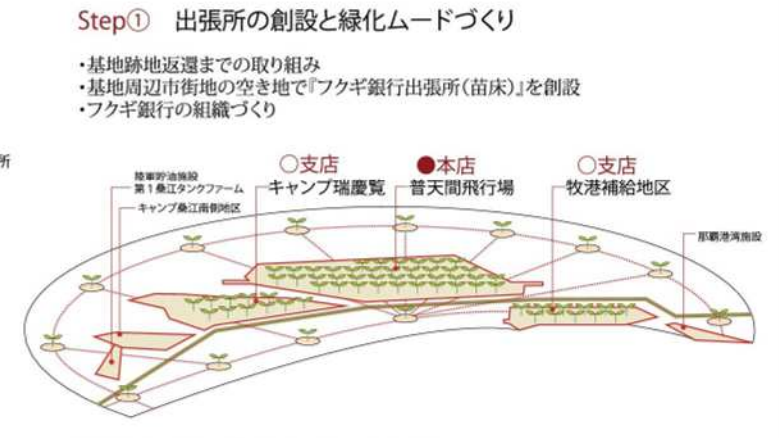
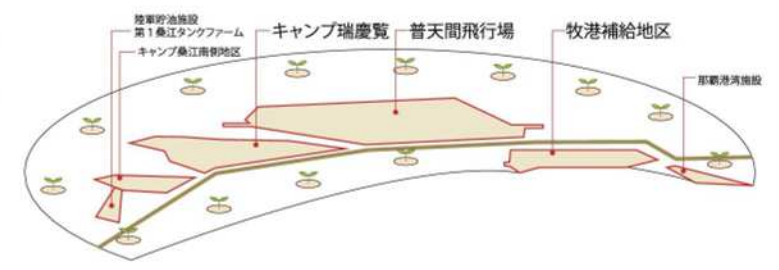


フクギは沖縄には欠かせない大切な木です。特に集落の抱護(村抱護・屋敷抱護)の木として、かつて琉球王府(蔡温)によって積極的に植えられました。塩害にも風にも強く、台風が多い沖縄では非常に適した防災林です。また強烈な日射しからも守ってくれます。しかし近年、鉄筋コンクリート造などの建物の増加などによって、大切なフクギが多く伐採されてしまいました。かつて沖縄の風景を彩っていたフクギが沖縄から消えようとしています。琉球王府が大切に育ててきたこの景観や快適な自然環境をもう一度、とりもどしませんか?

まずはフクギから増やして、その次はリュウキュウマツも育てます。リュウキュウマツはかつて琉球王府時代に松並木や村抱護に使用され、フクギと共に沖縄の景観を彩ってきました。このような沖縄特有の木を育て、村抱護や屋敷抱護、並木などを増やして沖縄らしい風景づくりをめざします。

このような緑の風景づくりがやがて沖縄の緑の骨格となり生物多様性の構築につなげていくことが究極の目標です。

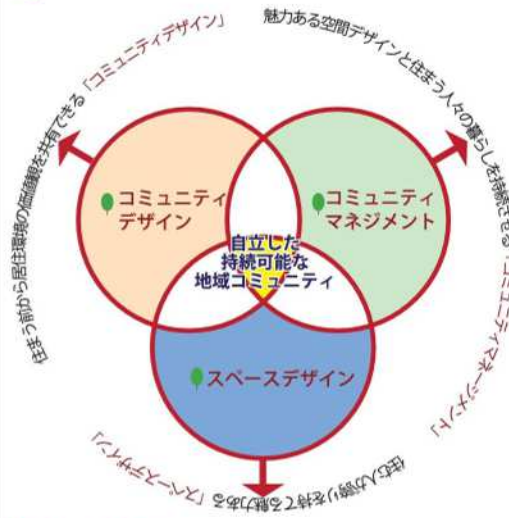
『フクギ銀行』のしくみ





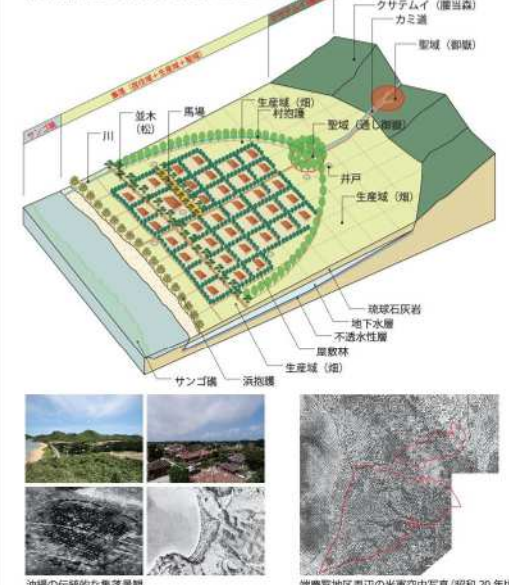
琉球のムラに学ぶ地域住民が参加し、創る『沖縄型自然住宅地(ガーデンシティ琉球)』のモデル地区

地域住民が参加し創るシステム(スペースデザイン+コミュニティデザイン+コミュニティマネジメント)



スペースデザイン
 沖縄の伝統的な集住環境に学ぶエコロジカルな居住システムの構築
 住まう人々が誇りに思えるコミュニティを実現するためには、いかに固有性をもった空間デザインを創出するかが大切です。それには地域性や風土性をいかしたデザイン手法が求められます。そのためには、生きつづけてきた伝統集落の空間構成や住まいのかたちを学び、また、地形をいかした空間デザインにより固有性を創出しなければなりません。

沖縄の伝統的な集住環境とは?
サンゴ礁+集落+クサティイ(腰当森)
 沖縄の伝統的な集落は集落背後のクサティイ(腰当森)に抱かれ、美しい海とサンゴ礁と一体となって成立する環境単位を構成しています。また近世以降の集落は海に近い場所に移動しているため、居住地を樹林帯で囲む、いわゆる村抱護によって強風から護られています。これは東アジアに伝わる地形と水系により形成される「環境単位」の形成概念として大切な考え方のひとつです。

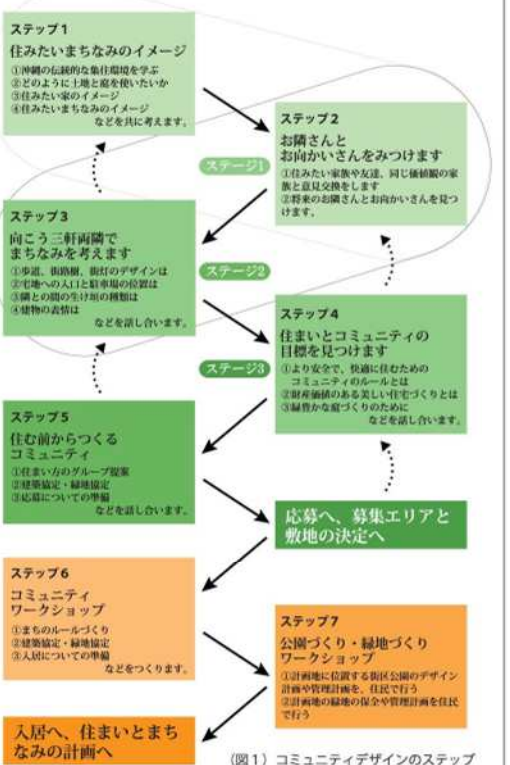


- 蔡温のムラづくりに学ぶ“抱き護る(抱護)”沖縄の島づくり
 宅地計画にはかつて蔡温(琉球王府の偉大な政治家)のムラづくりで積極的に進められた村抱護・浜抱護の概念を取り入れたマスタープランとします。
- 周辺市街地と連携(抱護)した自然豊かな沖縄型自然住宅地の形成
 計画地の自然住宅地は周辺市街地に対して開かれた計画とします。多くの緑地は計画地だけでなく周辺市街地の自然景観としての役割を果たします。
- 基地跡地があったからこそ残存した土地の記憶(地形・緑地)に敬意を払った住宅地計画
 計画地には残存する多くの緑地や微地形があります。これらリセットするのではなく、残存した土地の記憶を評価し、積極的に保全する土地利用とします。
- 定期借地権の導入による県土利用と豊かな住環境の創出
 土地は所有せず定期借地権とします。これは「土地は共同でコミュニティが所有する」という意識を住民が持つことによって良好な環境が維持されます。この一般定期借地権制度を導入することで、少ない資金でゆとりある敷地を借りることができ、余剰分を建築費用に活用することを実現可能にします。ここに住まう人たちは、住まいと住んでいることを誇りにし、質の高いコミュニティづくりをめざすことができます。
- 基地内の既存米軍住宅の空間的ゆとりと緑地をいかした住環境の提案
 基地内には、地形をいかし自然と調和した質の高い米軍住宅が多く存在します。この既存米軍住宅の施設配置や道路計画を評価し、活用することで空間的ゆとりと既存緑地をいかした住環境を提案します。

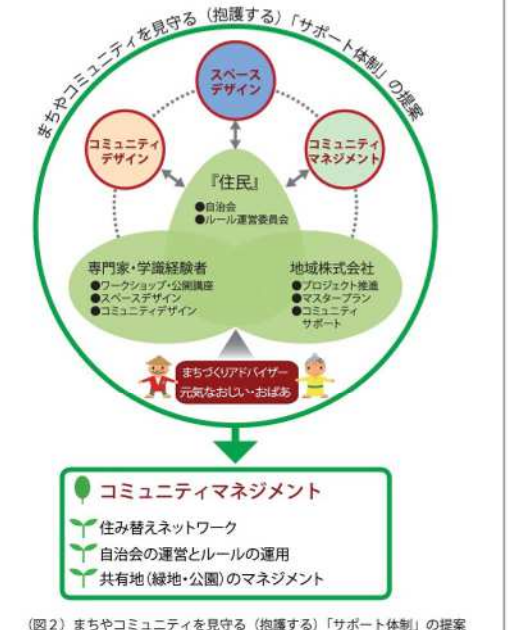
コミュニティデザイン
 サポート体制づくり
 地域株式会社や専門家・学識経験者が、継続的に「スペースデザイン」、「コミュニティデザイン」、「コミュニティマネジメント」といった専門分野のサポートを行うことにより、安定した継続的なまちづくりや自立した持続可能な地域コミュニティづくりを実現します。また地元元気なおじい・おばあがまちづくりアドバイザーとなり、沖縄の伝統行事や住まい元気をやさしくアドバイスします。(図2)

住まう前から住環境の価値観を共有する(住民参加型居住地計画)
 住まう前から住環境の価値観を共有するため、公開講座とワークショップによるコミュニティづくりを行います。大きく5つのステップ(図1)によって応募前にコミュニティを形成することで、計画地がコミュニティの共有財産と感じてもらうことを目指しています。あらかじめ向こう三軒両隣を基礎単位としたグループを、ワークショップを通じて形成し、より結びつきの強いコミュニティをつくらせます。

- **コミュニティマネジメント**
 住み替えネットワーク
 計画地の入居予定者に対して、現在の住まいからスムーズな住み替えをサポートすることで県内外を問わずさまざまな方が安心して入居できるシステムを提案します。現在の住まいの売却時期や、依頼する不動産会社の選択に関するアドバイスを行います。
- **自治会の運営とルールの運用**
 住まいのルールは、地域株式会社や専門家・学識経験者がサポートを行いながら、住民の意思で運用します。住民みずからルールをつくり運用するシステムを構築します。
- **共有地(緑地・公園)のマネジメント**
 住民参加型デザインの共有地はコミュニティによる維持管理を行います。これによってコミュニティがオーナーシップを持ち、さらなるコミュニケーションを促進します。



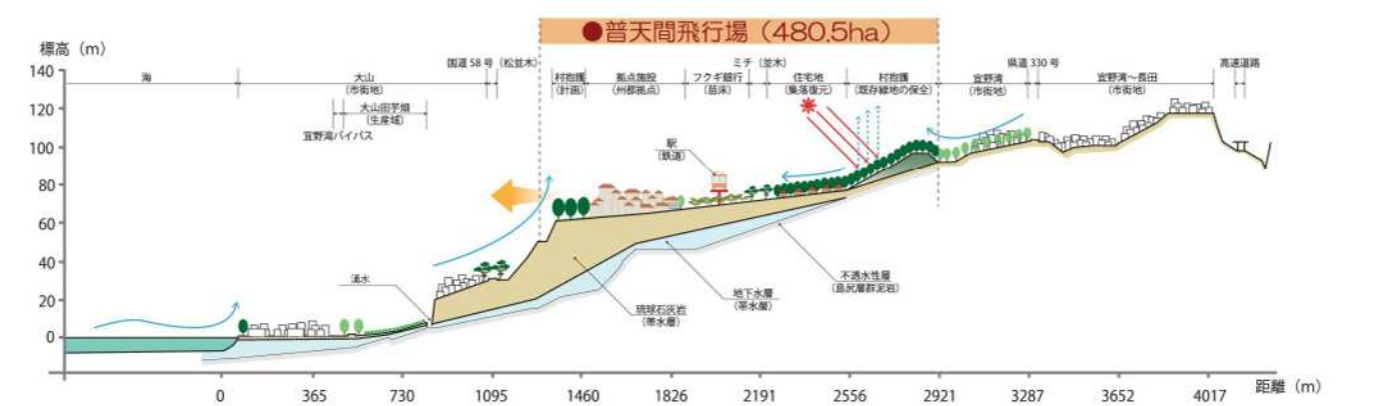
(図1) コミュニティデザインのステップ



(図2) まちやコミュニティを見守る(抱護する)「サポート体制」の提案

全体計画 10の提案と各返還跡地の対応

- 共通理念
- 1 蔡温のムラづくりに学ぶ“抱き護る(抱護)”沖縄の島づくり
- 2 駐留軍用地が存在したからこそ残存した“土地の記憶(自然丘陵地・水脈・緑地)”を保全し、創出する沖縄らしい風景づくり
- 3 蔡温に学ぶづくり“ゆいまるるじんぶん学校”
- **陸軍貯油施設第1 桑江タンクファーム(15.8ha)**
- 4 駐留軍用地が存在したからこそ残存した“土地の記憶(自然丘陵地・水脈・緑地)”を保全し、創出する沖縄らしい風景づくり
- **キャンプ桑江南側地区(67.5ha)**
- 10 アメリカ文化と沖縄文化の融合と基地の持つ空間的ゆとりや豊かな緑地をいかした“都市型居住”のモデル地区
- **キャンプ端慶覧(595.7ha)**
- 3 元気なおじい・おばあが生活躍り沖縄を支えるコミュニティづくり
- 5 300年生きつづける緑の骨格づくりをめざした「フクギ銀行」の創設(支店)
- 6 琉球のムラに学ぶ地域住民が参加し、創る『沖縄型自然住宅地(ガーデンシティ琉球)』のモデル地区
- 7 琉球王府に学ぶ自立型コミュニティ「地域株式会社」の設置
- **普天間飛行場(480.5ha)**
- 1 沖縄の発展を構想し自己決定権を持った一國二制度の「アジアにひらかれた沖縄州都」を建設
- 5 300年生きつづける緑の骨格づくりをめざした「フクギ銀行」の創設(本店)
- **牧港補給地区(273.7ha)**
- 4 アジアをつなぎ世界をつなぐ“万国津梁の架け橋”となる新時代の外交・交流・娯楽拠点の形成(外交・交流)
- **那覇港湾施設(55.9ha)**
- 4 アジアをつなぎ世界をつなぐ“万国津梁の架け橋”となる新時代の外交・交流・娯楽拠点の形成(娯楽)



【凡例】

- モノレール駅
- 鉄道駅
- かつて糸満と普天間を結んでいた軽便鉄道に因んだ現代の鉄道による広域交通ネットワーク
- 沖縄西海幹線
- 既存交通をつなぐ縦断線は、地形を変えない。新たな交通計画とし、緑木のネットワークを形成
- 幹線道路に琉球時代の風景をモチーフとした植木のネットワークを形成



●那覇港湾施設 (55.9ha)



- 1 "抱き護る (抱護)" 沖縄の島づくり
- 2 港・空港・カジノ・スタジアム・免税が一体となった国際的なエンターテインメント空間の形成
 - 沖縄へ入国しなくても入場できる、各国から直接乗り入れ可能なエンターテインメント空間
 - 空港・港・カジノ・スタジアムが一体化される空間形成
 - 国際旅客ターミナルの整備
 - 利益が他の基地跡地利用や沖縄全体の島づくりに活かされるシステム
- 3 ウォーターフロント景観を彩る親水公園

●普天間飛行場 (480.5ha)



- 1 "抱き護る (抱護)" 沖縄の島づくり
 - 2 港・空港・カジノ・スタジアム・免税が一体となった国際的なエンターテインメント空間の形成
 - 3 ウォーターフロント景観を彩る親水公園
 - 4 基地接収により移転した集落の復元
 - 土地の記憶・土地の遺伝子を辿り、重要復元箇所を選定して (松並木や水源など含む) 集落景観の復元を行い、沖縄の伝統的集落を持つエコロジカルな居住システムを構築する。
- 右写真：米軍撮影空中写真 (昭和 20 年頃)
- 1 新城
2 宜野湾
3 神山

●陸軍貯油施設第1 桑江タンクファーム (15.8ha)

- 1 "抱き護る (抱護)" 沖縄の島づくり
- 2 駐留軍用基地が存在したからこそ残した"土地の記憶 (自然丘陵地・水脈・緑地)"を保全し、創出する沖縄らしい風景づくり
 - 基地が残した地形や自然は全て保全し、かつ戦略的に創出する沖縄らしい風景づくりをめざします。

●キャンプ桑江南側地区 (67.5ha)

- 3 基地内外の米軍住宅の空間的ゆとりと緑地をいかした都市型居住モデル地区
 - 基地 (米軍の計画論) に学ぶゆとりある住宅地・道路・緑地計画
 - 北谷アメリカンビレッジと連携した国際色豊かな景観づくり
- 4 固有文化を表現した芸術と豊かな自然が融合する"琉球アート"の創出拠点
 - 県内外・アジア・アメリカの若手アーティストが活躍する場の提供
 - アメリカ文化・アジア文化・沖縄文化の融合を"琉球アート"として世界に発信

●"抱き護る (抱護)" 沖縄の島づくり

駐留軍用基地が存在したからこそ残した"土地の記憶 (自然丘陵地・水脈・緑地)"を保全し、創出する沖縄らしい風景づくり

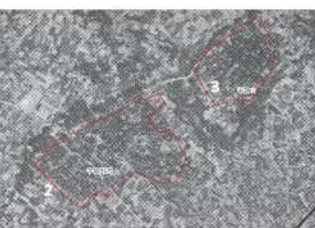
●沖縄の発展を構想し自己決定権を持った一國二制度の『アジアにひらかれた沖縄州都』を建設



●300年生きつづける緑の骨格づくりをめざした「フクギ銀行本店」を創設

フクギ銀行
FUKUGI BANK

基地跡地にまず「フクギ銀行」を創設します。本店は普天間飛行場、支店はキャンプ瑞慶覧、牧港補給地区につくります。



●牧港補給地区 (273.7ha)

- 1 "抱き護る (抱護)" 沖縄の島づくり
- 2 300年生きつづける緑の骨格づくりをめざした「フクギ銀行支店」を創設
- 3 沖縄の伝統的な集住環境に学ぶエコロジカルな居住システムの構築
- 4 琉球王朝以来、東アジア諸国との交易交流から形成された外交能力を発揮する"海邦交流拠点"
 - 外交地域としてのメリット (地勢) をいかした国際交流拠点に向けた基盤整備
 - リゾートホテルの整備
 - 民間経済交流団体との連携施設
 - 大規模な国際会議に対応できる施設



●キャンプ瑞慶覧 (595.7ha)

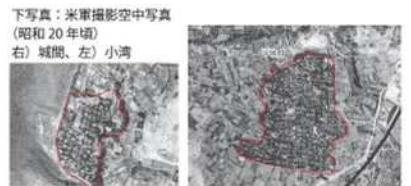


●5 アジア・太平洋地域の共通課題に対する研究・発信拠点

- 国際的な災害援助・研究拠点施設
- アジア・太平洋地域への国際協力・貢献活動拠点施設
- 世界にひらかれた交流と共生の島づくりを担う国際感覚に富む人材の育成拠点施設

●6 国際的な災害援助・防災公園

●7 基地接収により移転した集落の復元



●1 "抱き護る (抱護)" 沖縄の島づくり

- 基地が残した地形や自然は全て保全し、かつ戦略的に創出する沖縄らしい風景づくりをめざします。

●2 300年生きつづける緑の骨格づくりをめざした「フクギ銀行支店」を創設

●3 沖縄の伝統的な集住環境に学ぶエコロジカルな居住システムの構築

●4 基地内の既存米軍住宅を活用した、空間的ゆとりと緑地をいかした住環境の提案



●5 駅周辺に職・住隣接エリアを形成

基地跡地に高齢者や女性が活躍できる仕事場やボランティアの場を必ず組み込む

●6 住民参加型でつくる自然公園

住む前からワークショップを行い、自然公園を住民の手でつくり、育てる、住民参加型公園づくり

●7 基地接収により移転した集落の復元

